

## 教師独自のストレスナー，児童生徒へのかかわりを含むストレス反応と 教師観・教育観を規定する要因

—教師の属性による差の検討—

鹿児島県スクールカウンセラー 山下 みどり  
鹿児島純心女子大学大学院 若本 純子

### 和文要旨

本研究では，教師独自のストレスナーや児童生徒へのかかわりを含むストレス反応，教師観・教育観が教師の属性によって違いがあるかを検討した。小・中・高等学校の教師759名を対象とする質問紙調査の結果，①担任を担当していることが，教師のストレスナーやストレス反応に影響がある，②女性教師が男性教師より，多くのストレスナーやストレス反応を抱えている，③〈教師の抱え込み傾向〉は，勤務年数の短い場合に有意に高いことが明らかにされた。

キーワード：教師独自のストレスナー，児童生徒へのかかわり，教師観・教育観

### 問 題

**教師のストレスに関する現状と研究** 今日学校現場に働く教師には，本来の教育活動に加え，いじめ・不登校など学校不適応への対処，さらには保護者への対応なども求められている。このような過剰負担は，教師の心理的健康を阻害している。文部科学省（2010）によると，うつなどの精神疾患で休職した全国の公立の小中高等学校の教職員数は5,458人と過去最多を更新し，17年連続で増加している。いま，教師の心理的健康を守るためのストレス研究は急務である。

杉澤・中島（1997）は，教師の健康度の悪さや抑うつ重症度も一般の人より教師の方が高いことを指摘し，その要因を多忙さのみならず，児童生徒・保護者との関係にあることを明らかにしている。すなわち，教師の心理的健康の悪化は業務量の多さだけでは説明できず，業務内容の質的側面との関連が推測されるのである。したがって，教師のストレス研究は，教師の日常業務の文脈を的確に取り入れたものでなければならない。

先行研究にも教師独自のストレスナーを抽出し，検討するものは多い（e.g., 佐藤，1994：高木・田中，2003）。その一方で，ストレス反応に関し

ては，ストレス研究一般で用いられる心身症状を中心とする尺度が用いられる場合が少なくない（e.g., 金子，1999：中島，2003：高木・淵上・田中，2008）。しかし，教師たちに大きなストレスがかかった時，教育活動や児童生徒とのかかわりに影響が見られると考えられる。これらは心身症状や休職といった重大なストレス反応の前駆的状態とも見なしうるのだが，ストレス反応の一部として取り上げる検討はほとんどなされていない。

**教師のビリーフの多様な意味** 教師の独自性を反映するストレス研究のうち，教師固有の認知的特性に焦点をあてた研究群がある。代表的なのは教師のビリーフに関する研究である。教師のビリーフ研究では，とくにイラショナル・ビリーフに焦点をあてるものが多い。“教師はこうあらねばならない，教師だからこうすべきである”という非合理的な思い込みによって認知や行動が縛られ，ストレスが高まっていると示唆されている（e.g., 松浦，1997：土井・橋口，2000：河村，2000）。しかし，教師のビリーフを“イラショナル”という観点からのみ言及することには疑問が残る。“教師だから”との誇りや，“教師はこうすべきだ”との信念は，ストレスを高める側面もあるかもしれないが，教師を教師たらしめる，職業人と

しての基軸の部分でもある。“教師だから”とのビリーフを支えにして、日々の多忙な業務に取り組む教師たちが数多いであろうことを想像するに、教師のビリーフはストレスを促進する要因であるだけでなく、ストレスの悪影響を防止する要因にもなりうると考えられる。このような仮説を支持するのが山下・若本(2010)の知見である。山下・若本(2010)では、教師に対する面接調査の中で、ストレスを感じた時、教育活動に悪影響を及ぼさないためにどのようにマネジメントしているかについて回答を求めた。その結果、すべて教師たちが、自らの教育観に基づき、できる限り平常心で、真摯に児童生徒に対応しようとしていたのである。したがって、今後の教師のビリーフとストレスとの関連についての検討では、ビリーフを多方向から捉えることが必要と言えらるだろう。

**本研究の目的** そこで本研究では、教師独自のストレスサー、児童生徒へのかかわりを含めたストレス反応、そして教師観・教育観についての理解を深めるにあたり、教師の属性との関連性を明らかにすることを目的とする。

## 方 法

以下の通り、質問紙調査を行った。

**研究協力者** 鹿児島県及び東京都の公立または私立の小・中・高等学校教師

**調査時期** 2009年8月下旬～11月上旬

**調査手続き** 鹿児島県内の学校長に、本研究の趣旨と調査依頼を記した手紙と実際に配付する調査依頼書および質問紙を同封して郵送し、承諾の回答を得た学校に調査を依頼した。その際、1人分ずつの配付用封筒に「調査依頼書、質問紙、返信用封筒」を同封し、教師個人が回答後返信用封筒に密封の上返却してもらった。また、知り合いの教師を紹介してもらい、個人宛てに「調査依頼書、質問紙、返信用封筒」を郵送し、返信用封筒に密封の上返却してもらった。

**調査内容** 山下(印刷中)が、先行研究と教師に対する面接調査(山下・若本, 2010)の結果を踏まえて作成した4つの尺度を用いた。

①教師独自のストレスサー尺度(職務内容に対する不満)、(職務をめぐる対人葛藤)、(個人・

家庭の問題)の3因子から成る。

②教師としてのストレス反応尺度(心身のストレス反応)、(教育活動の質の低下)、(児童生徒への対応の減少)、(児童生徒への対応の質の低下)の4因子から成る。

③教師の教師観・教育観尺度(児童生徒への教育方針)、(児童生徒の立場の尊重)、(児童生徒との対等なかかわり)、(教師の抱えこみ傾向)の4因子から成る。

④教師の喜び尺度 教師観の一環として、「児童生徒の生きることにかかわれ、サポートできる」、「児童生徒のいろいろな側面にかかわれる」、「一人の人間の人生そのものに関わっているよこびがある」、「児童生徒の成長を目の当たりにできる」、「自分のかかわりが児童生徒に感謝されたり喜ばれたりする」、「教職は、自分の適性が活かしている」6項目に回答を求めた。

他に、フェイス項目として、年齢、性別、所属、職名、勤務年数、担任(担任、副担任、学年所属、その他)、校務分掌、教育歴、生計を一にしている家族の9項目に回答を求めた。

**回収・分析対象** 回答を得られた791名(回収率63.4%)のうち、年齢・勤務年数未記入、不完全回答分を除外した759名(有効回答率60.9%)を分析対象とした。平均年齢 $M(SD)=39.4(9.65)$  性別:男性416名(54.8%)女性343名(45.2%)

## 結 果

### サンプルの基本情報と分析の手法

**学校・性・勤務年数別** 学校・性・勤務年数別の内訳をTable 1に示す。全教員の平均勤務年数は $M(SD)=15.6(9.80)$ であり、最頻値は16年である。

教師独自のストレスサー、児童生徒へのかかわりを含めたストレス反応、教師の喜びを含む教師観・教育観と属性との関連を明らかにするために、各下位尺度から作成した計12変数を従属変数とし、属性としては性別、所属、勤務年数、校務分掌をとりあげ、差の検討を行った。属性のうち、年齢と勤務年数には、 $r=.88$ と高い相関があった。よって、この後の分析では年齢を用いず、勤務年数のみを採用した。

### 1 基本属性による差の検討

**地域** 本調査の対象内には，鹿児島県の教師と東京都の教師が含まれる。そこで，まず地域差を検討した。その結果，〈個人・家庭の問題ストレスナー〉においてのみ5%水準で有意差が見られ( $t(757)=1.98, p<.05$ )；東京都 $M(SD)=2.60(.55)$ ，鹿児島県 $M(SD)=2.30(.67)$ ，東京都の方が鹿児島県より有意に高かった。学校現場や児童生徒との関係に直結しない1変数のみでの有意差であったため，この後の分析では教師全員を併せて検討を行うことにした。

**性別** 性差の検定では，〈個人・家庭の問題ス

トレスナー〉( $t(757)=2.40, p<.05$ ；男性 $M(SD)=2.26(.62)$ ，女性 $M(SD)=2.37(.71)$ )，〈心身のストレス反応〉( $t(757)=3.47, p<.01$ ；男性 $M(SD)=2.01(.64)$ ，女性 $M(SD)=2.17(.60)$ )，〈児童生徒への対応の減少ストレス反応〉( $t(757)=2.39, p<.05$ ；男性 $M(SD)=1.93(.64)$ ，女性 $M(SD)=2.04(.62)$ )において有意差がみられ，いずれも女性の得点が有意に高かった。

### 2 学校要因による差の検討

まず，学校種によって差が見られるかを検討するために，分散分析を行った。その結果，〈職務

Table 1 学校・性・勤務年数別の内訳

学校	性別	勤務年数						合計	
		1～4年	5～10年	11～20年	21～30年	31～40年	41～50年		
小学校	男	16 (2.11)	26 (3.43)	56 (7.38)	14 (1.84)	6 (0.79)	0 (0.00)	118	(15.55)
	女	27 (3.56)	21 (2.77)	51 (6.72)	48 (6.32)	3 (0.40)	0 (0.00)	150	(19.76)
	小計	43 (5.67)	47 (6.19)	107 (14.10)	62 (8.17)	9 (1.19)	0 (0.00)	268	(35.31)
中学校	男	10 (1.32)	20 (2.64)	41 (5.40)	23 (3.03)	3 (0.40)	0 (0.00)	97	(12.78)
	女	11 (1.45)	15 (1.98)	17 (2.24)	16 (2.11)	9 (1.19)	0 (0.00)	68	(8.96)
	小計	21 (2.77)	35 (4.61)	58 (7.64)	39 (5.14)	12 (1.58)	0 (0.00)	165	(21.74)
高等学校	男	26 (3.43)	36 (4.74)	77 (10.14)	29 (3.82)	28 (3.69)	5 (0.66)	201	(26.48)
	女	19 (2.50)	39 (5.14)	41 (5.40)	14 (1.84)	11 (1.45)	1 (0.13)	125	(16.47)
	小計	45 (5.93)	75 (9.88)	118 (15.55)	43 (5.67)	39 (5.14)	6 (0.79)	326	(42.95)
全体	男	52 (6.85)	82 (10.80)	174 (22.92)	66 (8.70)	37 (4.87)	5 (0.66)	416	(54.81)
	女	57 (7.51)	75 (9.88)	109 (14.36)	78 (10.28)	23 (3.03)	1 (0.13)	343	(45.19)
	総計	109 (14.36)	157 (20.69)	283 (37.29)	144 (18.97)	60 (7.91)	6 (0.79)	759	(100.00)

注 数値は人数 (%)

Table 2 学校種による一元配置分散分析と多重比較(Tukey法)結果(従属変数：全変数)

		小学校	中学校	高等学校	F値	多重比較
		N=268	N=165	N=326		
		M(SD)			(Tukey法, $p<.05$ )	
ストレスナー1	職務内容に対する不満	2.31 (.57)	2.37 (.55)	2.32 (.52)	.53	
ストレスナー2	職務をめぐる対人葛藤	2.28 (.53)	2.42 (.53)	2.43 (.56)	6.00	** 小学校<中学校, 高等学校
ストレスナー3	個人・家庭の問題	2.35 (.67)	2.34 (.69)	2.26 (.65)	1.60	
ストレス反応1	心身のストレス反応	2.13 (.62)	2.12 (.62)	2.02 (.63)	2.46	
ストレス反応2	教育活動の質の低下	2.23 (.50)	2.25 (.56)	2.22 (.52)	.21	
ストレス反応3	児童生徒への対応の減少	1.84 (.58)	2.03 (.60)	2.06 (.67)	10.07	*** 小学校<中学校, 高等学校
ストレス反応4	児童生徒への対応の質の低下	2.58 (.48)	2.58 (.47)	2.54 (.48)	7.17	
教師観・教育観1	児童生徒への教育方針	3.38 (.36)	3.43 (.36)	3.41 (.34)	1.20	
教師観・教育観2	児童生徒の立場の尊重	3.58 (.36)	3.39 (.46)	3.35 (.40)	26.46	*** 高等学校<中学校, 小学校
教師観・教育観3	児童生徒との対等なかかわり	3.27 (.35)	3.27 (.38)	3.28 (.41)	.01	
教師観・教育観4	教師の抱え込み傾向	2.50 (.41)	2.48 (.38)	2.47 (.42)	4.71	
教師の喜び		3.06 (.45)	3.09 (.49)	3.12 (.47)	.97	

注) \*\*\*:  $p<.001$ , \*\*:  $p<.01$

をめぐると人葛藤ストレス) ( $F(4,756)=6.00, p<.01$ ), 〈児童生徒への対応の減少ストレス反応〉 ( $F(4,756)=10.07, p<.001$ ), 教師観・教育観の〈児童生徒の立場の尊重〉 ( $F(4,756)=26.46, p<.001$ ) に有意差がみられた。多重比較の結果, 〈職務をめぐると人葛藤ストレス〉と〈児童生徒への対応の減少ストレス反応〉では, 中学校, 高等学校が小学校より有意に高かった。教師観・教育観の〈児童生徒の立場の尊重〉では, 小学校, 中学校が高等学校より有意に高かった (Table 2)。

さらに, 勤務する学校が国・県・市・町・区立を公立とし, 私立と差の検定を行った。教師観・教育観の〈教師の抱え込み傾向〉 ( $t(756)=2.06, p<.05$ : 公立  $M(SD)=2.47(.41)$ , 私立  $M(SD)=2.58(.42)$ ) においてのみ有意差がみられ, 私立が公立より有意に得点が高かった。

### 3 職務内容, 勤務年数による差の検討

**担任** まず, 担任か否かによる差の検定を行った。その結果, ストレス(職務内容に対する不満  $t(757)=2.37, p<.05$ ; 担任あり  $M(SD)=2.37(.54)$ , 担任なし  $M(SD)=2.28(.55)$ ) とストレス反応(教育活動の質の低下  $t(757)=2.23, p<.05$ ; 担任あり  $M(SD)=2.27(.52)$ , 担任なし  $M(SD)=2.18(.52)$ ; 児童生徒への対応の質の低下  $t(757)=3.12, p<.01$ ; 担任あり  $M(SD)=2.61(.48)$ , 担任なし  $M(SD)=2.51(.47)$ ) において, 担任である場合に有意に得点が高かった。しかし, 同じストレス反応でも〈児童生徒への対応の減少〉では, 担任でない場合が有意に得点が高かった ( $t(757)=3.78, p<.001$ ; 担任あり  $M(SD)=1.90(.60)$ , 担任なし  $M(SD)=2.07(.65)$ )。

**生徒指導** 生徒指導は, 学校の校務分掌のなかでもひととき多忙を極める。担当するかないかでの差の検定を行ったところ, 教師観・教育観である〈児童生徒への教育方針〉 ( $t(757)=2.48, p<.05$ ; 担任あり  $M(SD)=3.47(.32)$ , 担任なし

$M(SD)=3.38(.36)$ ), 〈児童生徒との対等なかかわり〉 ( $t(757)=2.05, p<.05$ ; 担任あり  $M(SD)=3.33(.39)$ , 担任なし  $M(SD)=3.26(.38)$ ) と〈教師の喜び〉 ( $t(757)=3.31, p<.01$ ; 担任あり  $M(SD)=3.21(.45)$ , 担任なし  $M(SD)=3.07(.47)$ ) において有意な差がみられ, すべて, 生徒指導を担当している場合, 有意に得点が高かった。

**勤務年数** 最後に, 勤務年数による差の検討を行った。その際, 1年から40年にわたるキャリアをTable3に示す5段階に分類した(41~50年の6名は人数の少なさから分析より除外)。その結果, 12の従属変数中, 7変数に有意差が見られた。

まずストレス(職務内容に対する不満) ( $F(4,748)=2.87, p<.05$ ), 〈個人・家庭の問題〉 ( $F(4,748)=4.31, p<.001$ ) において有意差がみられた。多重比較の結果, 〈個人・家庭の問題ストレス〉は, 1~4年の教師がそれ以外の勤務年数の教師より有意に低く, 同様に, 5~10年の教師が11~30年の教師より有意に低かった。続く, 教師観・教育観では, すべての変数に有意差がみられた(児童生徒への教育方針  $F(4,748)=5.00, p<.01$ ; 児童生徒の立場の尊重  $F(4,748)=2.90, p<.05$ ); 児童生徒との対等なかかわり ( $F(4,748)=3.48, p<.01$ ); 教師の抱え込み傾向 ( $F(4,748)=6.53, p<.001$ )。多重比較の結果, 〈児童生徒への教育方針〉では, 1~4年の教師が11~40年の教師より有意に高く, 5~10年の教師が11~20年の教師より有意に高かった。

〈児童生徒との対等なかかわり〉では1~4年の教師が11~30年の教師より有意に高く, 〈教師の抱え込み傾向〉では, 1~4年の教師が5~20年の教師より有意に高かった。〈児童生徒の立場の尊重〉では差はでなかった。〈教師の喜び〉 ( $F(4,748)=4.31, p<.01$ ) にも有意な差がみられ, 多重比較の結果, 1~4年の教師が5~30年の教師より有意に高かった。

そして, ストレス反応においては, 勤務年数による有意差は見られなかった (Table 3)。

Table 3 勤務年数による一元配置分散分析と多重比較(Tukey法)結果(従属変数:全変数)

	①1~4年	②5~10年	③11~20年	④21~30年	⑤31~40年	F値	多重比較 (Tukey法 $p<0.05$ )
	N=109	N=157	N=283	N=144	N=60		
	M(SD)						
ストレス1 職務内容に対する不満	2.31 (.54)	2.38 (.52)	2.37 (.57)	2.26 (.54)	2.16 (.55)	2.87 *	
ストレス2 職務をめぐる対人葛藤	2.27 (.54)	2.42 (.51)	2.39 (.56)	2.38 (.55)	2.31 (.54)	1.58	
ストレス3 個人・家庭の問題	1.82 (.58)	2.20 (.65)	2.40 (.63)	2.58 (.64)	2.40 (.55)	26.49 ***	①<②,⑤,③,④ ②<③,④
ストレス反応1 心身のストレス反応	1.96 (.59)	2.03 (.67)	2.12 (.65)	2.17 (.59)	2.02 (.55)	2.31	
ストレス反応2 教育活動の質の低下	2.18 (.51)	2.26 (.51)	2.25 (.54)	2.18 (.52)	2.23 (.51)	.87	
ストレス反応3 児童生徒への対応の減少	1.93 (.62)	1.99 (.68)	1.98 (.65)	1.93 (.61)	2.04 (.54)	.45	
ストレス反応4 児童生徒への対応の質の低下	2.57 (.44)	2.53 (.52)	2.60 (.49)	2.51 (.45)	2.56 (.45)	1.11	
教師観・教育観1 児童生徒への教育方針	3.49 (.33)	3.46 (.35)	3.36 (.34)	3.36 (.37)	3.33 (.37)	5.00 **	⑤,④,③<① ③<②
教師観・教育観2 児童生徒の立場の尊重	3.50 (.39)	3.39 (.41)	3.39 (.43)	3.50 (.38)	3.46 (.39)	2.90 *	
教師観・教育観3 児童生徒との対等なかかわり	3.39 (.36)	3.29 (.38)	3.23 (.38)	3.25 (.38)	3.30 (.42)	3.48 **	③,④<①
教師観・教育観4 教師の抱え込み傾向	2.63 (.40)	2.44 (.38)	2.42 (.42)	2.52 (.38)	2.53 (.43)	6.53 ***	③,②<①
教師の喜び	3.25 (.47)	3.09 (.46)	3.03 (.47)	3.08 (.46)	3.14 (.46)	4.31 **	③,④,②<①

注) \*\*\* $p<0.001$ , \*\* $p<0.01$ , \* $p<0.05$

①1~4年, ②5~10年, ③11~20年, ④21~30年, ⑤31年~40年

## 考 察

本研究では、教師独自のストレス、児童生徒へのかかわりを含むストレス反応、さらに教師としての喜びを含む教師観・教育観において、教師の属性や職務による差があるのかを検討した。

### 1 基本属性

基本属性として地域と性別を用いて、教師のストレスに違いがあるかの検討を行った結果、女性教師が男性教師より、心身のストレス反応を高く感じ、児童生徒への対応量が減少したと感じていることが示された。これは、杉若・伊藤(2004)、米山・松尾・清水(2005)が指摘する女性教師は男性教師に比べ多忙であり、心身のストレス反応がでやすいとの知見と一致する結果である。成人女性は、自分の身体や健康に高い関心を払う傾向がある(若本, 2002)ことも、この結果と関連しているだろう。

しかし、より重要だと思われるのは、女性教師は家庭役割に関する責任感をより強くもつがゆえに、多重役割の負荷にさらされやすいという点である。今回の検討でも、ストレス反応と〈個人・家庭の問題〉がともに有意に高かった点を見逃してはならない。女性教師たちが、きわめて多忙な

教師という仕事と同時に、子育てや介護、家事などの問題を抱え、心身状態の悪化や教育活動の量的低下に至っていることが推測される。

一方、地域間の比較によって〈個人・家庭の問題〉が東京のほうが有意に高かったことは、東京では男女ともに家庭役割のストレスを感じているとも考えられる。すなわち、東京では性分業の解体が進行し、ワーク・ライフ・バランスに伴う葛藤(若本・宮内・上加世田・吉田, 2010)が女性だけでなく男性にも経験されているのかもしれない。

### 2 学校要因

続いて、学校種と設立形態による差の検討を行った結果、ストレス、ストレス反応、教師観・教育観各1変数で有意差が見出されたが、それは学校の特徴を反映するものであった。

中学校・高等学校教師は、小学校教師より〈職務をめぐる対人葛藤ストレス〉が有意に高かった。これは、小学校が教育活動を企画・運営するための話し合いの機会が多く、職員間で共通理解が図りやすい環境であるのに対し、中学校、高等学校は教科単位で専門性が異なり、相互理解が難しい点に由来すると考えられる。中学校の教師は、お互いに相談がしにくい関係である(田村・石隈,

2002) との指摘とも合致すると考えられる。

〈児童生徒への対応の減少ストレス反応〉についても同様に、学校種が異なることによる枠組みの違いが考えられる。小学校は担任制であるので、児童生徒へのかかわりが減ることはなく、教科のみでのかかわりに限定できる中学校・高等学校との間の有意差になったと思われる。また、小学校・中学校の教師は、高等学校の教師より教師観・教育観の〈児童生徒の立場の尊重〉において得点が有意に高かったことに関して、各学校段階の教育目標の違いによるものであろう。

そして、私立学校の教師は、公立学校の教師より教師観・教育観の〈教師の抱え込み傾向〉が有意に高かった。教師の雇用形態や評価システムの違いがこの結果につながっていると考えられる。

### 3 職務内容と勤務年数

**職務内容** 本研究では、職務内容として、担任と生徒指導を取り上げた。いずれも多忙をきわめ、ストレスフルな職務である。まず担任についての検討では、〈職務内容に対する不満〉ストレスが有意に高く、〈教育活動の質の低下〉や〈児童生徒への対応の質の低下〉という形で有意に高いストレス反応がみられた。担任は、児童生徒への教育活動のみならず、保護者・地域への対応、学年や学校としての足並みをそろえた対応、教育委員会等への報告書の提出など雑多で膨大な業務に追われている。田中・高木(2008)が言う「多様な業務への煩雑感」が示すとおりである。今回の検討結果をまとめると、担任がその煩雑な業務に忙殺されることでストレス反応へと至るが、それは児童生徒へのかかわりへ「量の減少」ではなく、「質の低下」となって表れる、というものであった。担任として児童生徒にかかわってはいるが、その「質が低下」する、すなわち、担任業務に追われるあまり、児童生徒をつい叱ってしまったり児童生徒の話を聞く余裕がなくなったりというように、教育活動に専念できなくなっていることがうかがえる。

担任同様に多忙な生徒指導だが、担任とは全く異なる結果が得られ、教師観・教育観の〈児童生

徒への教育方針〉、〈児童生徒との対等なかかわり〉と〈教師の喜び〉が有意に高かった。生徒指導という立場から、児童生徒に子どもらしいきちんとした姿を求め、信念と愛情を持ちかかわっている姿が想像される。これは、飯野(2003)のいう、生徒指導を成功させる教師の3つの役割(ヘルパー、トレーナー、パートナー)とも合致する。また、松嶋(2005)は、教師は生徒指導で児童生徒との「人間的なつきあい」を体験しているとしている。これは、〈児童生徒との対等なかかわり〉と同義といってよいであろう。生徒指導で児童生徒と話をするとき、教師自身の失敗談なども含めて、児童生徒の心に届くように語ることもある。これは相手を一人の人間として大切に思っているからこそできると考えられる。そして、このように児童生徒とかかわること、さらにはそのかかわりによって児童生徒の成長を目の当たりにできることが、〈教師の喜び〉につながっていると考えられる。

**勤務年数** 勤務年数による差の検討では、多くの変数において有意差が見られた。まずストレスのうちの〈職務内容に対する不満〉では5~20年の教師の得点が高かった。中堅として期待される教師への多くの職務の負担があることは、想像に難くない。一方、〈個人・家庭の問題〉は、勤務10年以内の教師たちが有意に低く、未婚者の多さなど、家族構成の影響が考えられた。

その分、勤務年数の短い教師(1~4年)は、教師の喜びを含む教師観・教育観のすべての変数で有意に得点が高かった。〈児童生徒への教育方針〉、〈児童生徒の立場の尊重〉、〈児童生徒との対等なかかわり〉、〈教師の喜び〉における差は、教職や教育に対する情熱や希望をもって取り組んでいるためと思われる。教職を志望して職についたばかりであるので、教育に対するモチベーションも高いであろう。しかし、そのやる気の高さゆえに、〈教師の抱え込み傾向〉も有意に高い。学級のことは自分で何とかすべきであるという考えや自分の弱みを同僚や児童生徒に見せたくないという考えがあると思われる。

## 総合考察

本研究では，教師独自のストレスナー，児童生徒へのかかわりを含めたストレス反応，そして教師観・教育観と教師の属性との関連を検討してきた。その主な結果をまとめ，本研究がもつ教師のストレス研究に対する意義に言及する。

**女性教師** 女性教師は心身のストレス反応，児童生徒への対応の減少が有意に高く，ストレスの悪影響が最も懸念される群であった。その背景には，家庭に対する責任感と多重役割が考えられた。

**担任** 担任を受け持っている教師の多忙さや煩雑さがストレスナーとなり，児童生徒へのかかわりの質に関連しているということが示唆された。教師のストレスが，児童生徒へのかかわりに直接的に影響を及ぼしているとも言えるだろう。本研究では，教師のストレスを考慮するにあたり，心身症状などのストレス反応以前に，児童生徒へのかかわりに影響があらうと想定し，検討を行った。その際，児童生徒へのかかわりの量的・質的低下という点で多くの有意差を見出したことから，この変数の有用性と本研究の妥当性が支持されたと言えるだろう。

**生徒指導** 担任同様きわめて多忙な生徒指導を担当している教師は，児童生徒とのかかわりにおいて，自分の教師観・教育観をもち，児童生徒を一人の人間として導くことを大切にしていることが明らかになった。それがまた，教師の喜びにもつながっていた。

その一方で，ストレスナー，ストレス反応には有意差は見出されなかった。生徒指導担当している教師は，ストレスナーやストレス反応が高いという知見（宗像・椎谷，1988）とは矛盾する結果である。その理由に関してはいくつかの考察が可能である。まず時代性である。宗像・椎谷（1988）の時代は，希望すれば誰もが教師になれた時代である。「でもしか教師」という言葉，すなわち「教師にでもなるか」「教師にしかできない」という言葉すら流布した時代であった。しかし，現在，教師は狭き門である。鹿児島県のここ数年の採用率は10%以下である（南日本新聞，

2010）。また，近年，教師の数は減らされており，どのような校務分掌にあたらうと，多忙であるには変わりはない。こういった現在の時代性を反映しての結果であろう。

もうひとつ考えられるのが，本研究が用いた変数の影響である。生徒指導を担当する教師は，ストレスナー，ストレス反応には有意差が見られず，教師を支え動機づけとなる教師観・教育観，教師の喜びが有意に高かった。これは，担任がストレスナーの認知とストレス反応において有意に高い得点を示しているのと対照的であった。担任が膨大な雑務に疲弊しているのに対し，生徒指導を担当する教師は，児童生徒との緊密なかかわりによって，教師としてのやりがいを強くしている。ここには，教師のストレスを検討するには，「多忙」という量的なストレスナーを考慮するだけでは不十分で，「多忙ではあるが，教師ならではのやりがいがある」といった質的で複雑な面にまで注目する必要性が明示されている。とくに，教師観や教育観のもつポジティブな機能は，ビリーフの別の側面を示したものとして興味深い。

**勤務年数の短い教師** 勤務年数の短い教師は，教師としての自負ややりがいをもって児童生徒とかわっていることが明らかになった。しかし，そのやる気や思いが，教師を追い詰めていくものとなる可能性も浮き彫りになったといえよう。

**まとめ** 以上のように，担任や女性教師，そして勤務年数の短い教師には，ストレスに対する支援が必要であると考えられる。今後，これらの知見をもとに，教師のストレスマネジメント等のさらに詳しい検討が望まれる。

付記 本稿は平成21年度鹿児島純心女子大学大学院人間科学研究科修士論文の一部を加筆修正したものである。

## 引用文献

- 土井一博・橋口英俊(2000):中学校教師におけるイラショナル・ビリーフと精神的健康との関係 健康心理学研究 13, 23-30.  
飯野哲郎(2003):「なおす」生徒指導「育てる」生徒指導—カウンセリングによる生徒指導の再生 図書文化社

- 金子百恵(1999):教師のバーンアウトとメンタルヘルス 性格心理学研究 7, 102-103.
- 河村茂雄(2000):教師特有のピリーフが児童に与える影響 風間書房
- 松嶋秀明(2005):教師は生徒指導をいかに体験するか?—中学校教師の生徒指導をめぐる物語— 質的心理学研究 4, 165-185.
- 松浦善満(1997):私たちの求める教育改革—多忙化の克服と学校改革の課題—バーンアウト研究から 教育 47, pp.45-52.
- 南日本新聞(2010):2011年度県公立学校教員等選考試験結果発表 鹿児島県教育委員会 南日本新聞ホームページ 2010年10月9日  
(<http://373news.com/modules/pickup/index.php?storyid=27129>)  
(2011年2月28日)
- 文部科学省(2010):平成21年度教育職員に係る懲戒処分等の状況について 文部科学省ホームページ  
([http://www.mext.go.jp/a\\_menu/shotou/jinji/1300256.htm](http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/jinji/1300256.htm))  
(2011年2月1日)
- 宗像恒次・権谷淳二(1988):中学校教師の燃えつき状態の心理社会的風景 土居健郎(監修) 燃えつき症候群 金剛出版 pp.96-131.
- 中島一憲(2003):先生が壊れていく—精神科医のみた教育の危機— 弘文堂
- 杉澤あつ子・中島一憲(1997):都市部の公立小中学校に勤務する教員の心身の健康状態 産業衛生学雑誌 39, 275.
- 杉若弘子・伊藤佳代子(2004):小・中学校教員のストレス経験—尺度の開発と現状分析— 奈良教育大学紀要(人文・社会) 53, 55-62.
- 佐藤 学(1994):教師文化の構造 日本の教師文化 稲垣忠彦・久富義之(編) 東京大学出版会 pp.21-41.
- 高木 亮・淵上克義・田中宏二(2008):教師の職務葛藤とキャリア適応力が教師のストレス反応に与える影響の検討:年代ごとの影響の比較を中心に 教育心理学研究 56, 230-242.
- 高木 亮・田中宏二(2003):教師の職業ストレスに関する研究—教師の職業ストレスとバーンアウトの関係を中心に— 教育心理学研究 51, 165-174.
- 田村修一・石隈利紀(2002):中学校教師の被援助志向性と自尊感情の関連 教育心理学研究 50, 291-300.
- 田中宏二・高木 亮(2008):教師の職業ストレスの類型化に関する研究—職場環境・職務自体・個人的ストレス要因に基づいた類型化とバーンアウトの関連— 岡山大学教育学部研究集録 137, 133-141.
- 若本純子(2002):成人期・中年期における“主観的老いの経験”の検討 日本教育心理学第44回総会発表論文集 18.
- 若本純子・宮内七菜・上加世田寛子・吉田ゆり(2010):成人女性の葛藤:ワーク・ライフ・バランス, 子育て, 母娘関係をめぐる概観 鹿児島純心女子大学大学院心理臨床相談センター紀要 5, 3-10.
- 山下みどり(印刷中):教師独自のストレスとストレス反応, ストレス反応を規定する要因を測定する尺度作成—教師のストレスは児童生徒へのかかわりに影響をもたらすのか— 鹿児島純心女子大学大学院心理臨床相談センター紀要 6
- 山下みどり・若本純子(2010):教師のストレスが児童生徒へのかかわりにもたらす影響とその影響を最小化する心理的要因—教師に対する面接調査から— 日本教育心理学会第52回総会発表論文集 543.
- 米山恵美子・松尾一絵・清水安男(2005):小学校教師のストレスに関する研究—ストレス, 自己効力感, コーピング, ストレス反応を指標とした検討 学校メンタルヘルス 8 103-113.

## Abstract

The teachers' specific stressors, stress reactions which include communications with pupils, and a view on teacher and an educational philosophy  
: Differences by teacher's attributes

This research examined the relation between teachers' specific stressors, the stress reaction which include communications with pupils, and a view on teacher and an educational philosophy with teacher's attribute. With 759 responses of teachers in elementary, junior-high, and high schools, the result showed that, teachers in charge experienced more stressors and stress reactions, female teachers had many stressors and stress reactions than male teachers, and teachers who worked less than 10 years took on work significantly.

KeyWords : teachers' specific stressors, Stress reactions which include communications with pupils, A view on teacher and an educational philosophy